



＊第22回＊ 丹羽麻里子

インテレクト

特許情報サーチャー という職業

～理系と文系が駆け合うところ～

文系or理系、 ワタシはどっち！？

「えっ？アナタが『リケジョ』？ブツ…アッハハハハハ…!!!」

本稿を私が書くことになったと報告したときの、これが夫の反応でした。このあまりといえばあまりな反応に私は少し腹を立て、「何がそんなにおかしいわけ？」若干キツイ口調で返すと、夫はさらに顔をクシャクシャにしての大笑い。

確かに、夫がおかしがるのも一理あります。それは私が一般的な「リケジョ」とはかけ離れすぎているからです。

私は最終学歴こそ工学修士ですが、この学位は社会人10年目にして社会人大学院に通って取得した学位で、それまではずっと文系畑を歩んできました。保育園の頃から一番好きな遊びは音楽を聴いて本を読むこと、小学校では理科は好きでしたが算数が苦手、高校で一番苦労したのは数学と物理、翻って好きな教科は国語や英語といった調子で、外国語学部にて籍を置いていた大学時代には将来の職業として英語の教師か、外国で日本語を教える教師か、翻訳者になりたいと考えていたのです。

私は今、「特許情報サーチャー（たいていは単に『サーチャー』と呼ばれま

す）」という職業に就いています。主な仕事は文字通り「特許情報を探す」ことです。

よく知られているように、特許とは新規な発明をした者に一定期間その発明を独占できる権利（＝特許権）を与える行政行為を言います。新規で有用な発明は、それが優れた発明であるほど模倣されやすいものです。簡単に模倣されるのでは発明を生み出す意欲がそがれますし、かといって発明を秘匿すれば第三者による改良が行われなくなり、科学技術の進歩は停滞してしまいます。そこで、発明を一般に公開する代償として期限を設けた独占権を与えるのが特許制度です。発明に対し特許を与えるかどうかは、特許庁の審査官が審査して決定します。特許されるための要件は特許法によってきめ細かに定められていますが、その発明が新規であること（＝新規性）、かつ、その発明を創作するのにある程度の困難性があること（＝進歩性）が一番に挙げられます。

先ほど述べたように、特許出願された発明は一般に公開され、それは出願から1年半経過後に公開公報として特許庁から発行されることによって行われます。このように公開された特許情報はデータベース化され、工業所有権情報・研修館（INPIT）が提供する特許情報検索システム「J-PlatPat」で誰でも無料でアクセス可能になります。また民間のデータベース作成会社にも提供され、いくつもの有償商用データベースが作成されて、契約している



工業所有権情報・研修館（INPIT）が提供する特許情報検索システム「J-PlatPat」のトップページ

ユーザはJ-PlatPatよりもさらに使い勝手が良く、高性能で、レスポンスの早いデータベースを使うことができます。特許情報サーチャーは、これらのデータベースを駆使して特許情報を検索し、収集し、分析・解析し、依頼者に調査結果をお届けする、すなわち科学技術情報を扱う専門家なのです。

「理系」との出会い

私が就職活動を行っていた1999年はいわゆる「就職氷河期」の真っただ中で、特にこの年は大卒の求人倍率が1を下回るという氷河期の中でもいちばん厳しい年でした。公立学校の教職員は募集がないため、教師への道を貫くなら私立学校か学習塾に就職するしかなく、しかしそれはとても細く狭い門でした。一方、翻訳者のほうはといえば、教師に輪をかけてなりにくい職業でしたが、その頃の私はむしろこちらの方に気持ちが傾いていたのです。翻訳者と一口に言ってもさまざまな専門分野があります。誰もがすぐに思い浮かべる翻訳といえば文学翻訳や字幕

↑株式会社インテレクト
"Being a Professional Patent Information Searcher, In a fusion between humanities and sciences" by Mariko Niwa (Intellectual Property Search Division, Intellect Inc., Tokyo)



作成だと思いますが、私が心を惹かれたのは技術文献翻訳でした。

授業ではさまざまな文書の翻訳を扱いました。児童文学もあればビジネスレターもあり、商標のライセンス契約書から英字新聞の記事、数々のエッセイまで。そのような課題の中にある日、その頃普及し始めていた携帯電話の通信の仕組みを解説する文章がありました。この課題は、高校2年生以降数学とは無縁だった私を4年ぶりに三角関数で苦しめました。専門用語とおぼしき単語も、辞書を引けば日本語訳は出てくるものの、その日本語の意味が私にはわからないのです。日本語の意味が解らなければ正確な翻訳にはなりません。はたしてその課題は、私にとって英語や翻訳の勉強よりはむしろ技術の勉強となり、図書館の席は日本図書分類でいう8類のエリアから5類の近くになり、理系の学部にいる友人たちの助けを借りながら最後は徹夜で翻訳を仕上げ提出しました。

これが、それまでずっと文系の世界で生きてきた私の、理系との出会いでした。翻訳の作業よりも、携帯電話の通話システムという最先端技術について知ることの方にむしろ面白さを見出してしまったのです。さらに後日特許明細書が課題文書となったとき、外国に特許願するのための明細書翻訳者になれば、まだ一般には公開されていない、当然製品にもなっていないほどの最先端技術文書を読むことができるのだと知って、特許翻訳者になりたいと思うようになりました。

特許翻訳者になるはずが

心身ともに削られていくような就職活動の末、卒業を目前にした2月になってからようやく特許翻訳者として応募した会社から内定通知を頂いたときは、心からホッとしたものでした。家族にも喜ばれ、このご時世に自分の希望通りの職種に就けたことを本当に嬉しく思いました。入社した会社はいわゆる「翻訳会社」ではなく、特許事務所から特許翻訳と特許調査に関係する部門が独立してできた会社で、翻訳以

外の業務もいろいろと行っておりまして。入社当初から上司には「うちの会社には特許翻訳だけ、あるいは特許調査だけをやる人間はいない、どちらもやれるように教育する、ただし本人の適性その他に応じてその比重が変わることはある」と言われ、調査の指導も受けていました。入社当初は調査よりも翻訳をやりたいと思っていましたが、今では翻訳をまったくくなくなり、業務のほぼすべてが調査というのだから、先のことはわからないものです。

特許調査という仕事

特許調査には、その目的によって「出願前公知例調査」、「無効化資料調査」、「侵害予防調査」、「法的状況調査」等の種類があり、これらの種類分けは人によって異なったり、また呼び方が異なったりすることがあります。例えば、出願前公知例調査は読んで字のごとく、出願前に公知例を探すための調査ですが、出願前先行技術調査と言ったり、あるいは簡単に「出願前調査、先行技術調査」ということもあります。特許というのは上述のように新規な発明にしか与えられません。ですから、少なからぬ費用をかけて特許庁に出願をしたり審査請求を行ったりする前に、すでに同様の発明がされていないかどうかを確認するのが望ましく、そのために過去に公知になった技術（先行技術）を調査するのが出願前公知例調査というわけです。また「新規性調査」という言い方もされます。

さて、特許庁が審査の末に特許した発明であれば新規な発明である、ということに一応はなりますが、公知例がアクセスしにくい文献に記載されていることもあれば、審査官も人間ならば審査に100%過誤がないというわけでもなく、特許されるべきでない発明が特許されていることもあり得ます。特許権は期限付きとはいえ独占権ですから、自分が進めようとしているビジネスに支障をきたしそうな他者の特許権があれば、その特許発明に新規性がないことを理由に特許を無効化しようと試みる場合があります。その「新規性

がない」ことの裏付けとして公知例を調査するのが「無効化資料調査」です。調査の規模やかける費用、実施するタイミングは異なりますが、目的や調査手法は出願前調査と同じであるため、両方を「公知例調査」、「先行技術調査」ということもあります。

そして、ビジネスを進めるにあたり、予め支障をきたしそうな特許権を洗い出しておく、という作業が「侵害予防調査」です。「実施可能性調査」、「クリアランス調査」とも言います。

この三つの調査には重要な違いもありますが、大きく括って「データベースで検索をしたら、ヒットした大量の文献をひたすら読み込む」という点では共通しています。ケース・パイ・ケースですが、1件の調査で少なくとも200件、平均で千件程度の技術文献を読み込みます。文献の種類は特許公報が最も多く、他には学術論文、会議録、新聞・雑誌記事、一般書籍等です。経験が少ないために自分の知識が足りない技術分野では、文献を読み込む前に、正確には調査に着手する前に、本を何冊も読んだりインターネットで参考情報を検索したりといった勉強が欠かせませんので、それらも含めると膨大な文書量です。

どんなに読書が好きでも特許公報は別で読むのが苦痛、という方もいますが、私は特許公報でも学術論文でも読み物ならなんでも好きで、たくさん文献を読むことに苦痛を感じたことはありません。さまざまな分野をランダムに調査するので、その都度新たな知識に出会え、同じような技術分野でも少し調査範囲が異なれば必ず未知の何かに出会うことができるからです。技術は過去からの積み重ねで進歩してきており、古い文献から年代を追って読んでいくと、当時の技術水準や解決を目指していた課題、その課題に対する各社のアプローチや市場戦略などが見えてきて、非常に面白く感じられます。

理系と文系の狭間

このように特許調査とは、膨大な文献を毎日ひたすら読み続けるという文

系的な仕事でありながら、決して技術という理系的なものから分離しえない、いわば文系と理系の両面を持つものです。さらに言うと、特許調査だけでなく特許翻訳も同様に両面を持っていますし、特許出願の代理や出願書類の作成をする弁理士も、法律に則った行政手続きや文書作成といった文系的な仕事と、技術を理解し把握し発明を特定するといった理系的な仕事の両方をこなします。これは、そもそも特許というものが発明を生み出す「理系」的な面と、権利の取得や行使に関わる「文系」的な面の両面性を持っているからではないでしょうか。技術がわからないようではダメ、技術だけしかわからないようではダメ。言葉を使いこなせなければダメ、言葉だけ繕ってはダメ。サーチャーという職業について4年ほど経った頃からそのことを実感し、未知の技術分野に出会うたびに独学で勉強するだけでは足りない、調査のスキルをもっと高めるためには、自分の中の文系と理系のバランスをもっと理系側に重心を移す必要がある、そう考えるようになりました。当時の職場の目と鼻の先にキャンパスがあった社会人大学院で勉強することを決意したのはそのためです。通いやすいということが大きなメリットであったことは確かですが、何よりその大学院は、理系科目を履修して理系の学位を取ることができるだけでなく、知的財産法全般についても満遍なく学べるという、私の目標にドンピシャの学習コースがあったからです。

「狭間」から「融合」へ

所属するゼミや学生本人の希望によって大学院でのカリキュラムの組み方はさまざまですが、理系科目(IT系科目)と文系科目(知的財産法科目)が用意されているという点で、大学院での勉強もまた理系と文系の両面に接していたと言えます。同期入学の学生たちも入学前の学歴やキャリアはさまざま、文系の人でもいれば理系の人もあり、特許業界歴の長い人もいれば知的財産は未経験だという人もおりました。

た。学生の年齢層も広く厚くて、私がそれまで出会ったことがなかったような多様な人たちとの出会いのおかげで、2年間のキャンパスライフは大変に刺激的な日々でした。上辺だけかじって解ったような気持ちになる付け焼刃の勉強ではなく、厳しい試験や評価のある中で、時に徹夜をしたりキャンパスの近くに泊りこんだりして勉強をしたこと、職業や職種の枠を超えた学生同士としての交わり…。たくさんの得難い経験を重ねながら修了する頃には特許サーチャーとしても10年目に入り、自分の居場所についての意識が少しずつ変わってきました。

それまで、自分は文系と理系の「狭間」にいるのだと思うことが多くありました。それはただ「間」にいるというだけのことではなく、自分はどちらにも所属していない、という気がしていたのです。文系出身でありながら仕事は完全には文系でなく、理系の範疇にまで手を出しながらその技術分野も極められておらず、中途半端。ですが、工学修士の学位を取り「リケジョ」となった今では違う考えを持つようになりました。「どちらでもない」ではなく「どちらでもある」と思うようになってきたのです。異質なものの間にいて双方の面に挟まれているような窮屈さでなく、双方が混じり合って融け合った、どちらか一方だけよりもさらに豊かな世界にいることの面白さを感じて、自分の仕事をますます楽しく、やりがいのあるものと思うようになりました。白衣を着て実験データを取ったこともなく、理系の学位を取ってもふだんの私の思考は相変わらず論理的というよりは情緒的で、冒頭のごとく、夫に「理系らしくない」と笑われたりもします。しかし、自分の居る場所は文系と理系の融け合う場所なのだと思うと、その「らしくなさ」もまた良いものに思えるのです。

むすび

これまで、リケジョの「リケ」の方ばかり触れてまいりましたので、「ジョ」についても最後に少し書きたい



大学院の修了式でゼミの副査教授と。今では職場の上司です。

と思います。

第1子である娘の妊娠が判明したのは大学院の受験準備中でした。さすがにこの時は受験を諦めましたが、育児休業から復職するとどうしても進学したくなり、娘が2歳になったばかりの年に入学しました。修了は娘が4歳間近の時に、その約2年後に第2子である息子を出産しました。

妊娠・出産は女性にしかなることができず、またどれほど計画しても思い通りにはならないことがあります。ですが、育児はそれと異なり、母乳を出すこと以外は母親でなくてもできるのです。大学院に通っていた頃、仕事と学業と家庭の両立はどうやっているのかと聞かれることがたびたびありましたが、私はいつもわざと「両立などしていません」と答えていました。仕事と学業は両立させていたかもしれませんが、家事育児は夫がメインで担当し、私は夫ができない分をカバーするだけだったため、家庭との両立などしていないと答えていたのです。

性別によって決まった型や役割を世間から求められることもまだありますが、それを少しでも取り払いたくて、私は敢えて良妻賢母に一時ご退場を願い、そんな私に夫は「内助の功」を発揮してくれました。「産み時」は女性がキャリアプランを考える上での重要事項ではありますが、打ち込みたいものに打ち込みたいときに打ち込めるリケジョが、これから多く出てきてほしいと思います。そしてそのために、私はリケジョの先輩方が切り開いてくれた道を広げて踏み固めるように歩んでいきたいと思います。(2015年3月31日受付)